

<論文>

日本人大学生による姓名の順番の選択 —英語の自己紹介場面において—

酒井英樹 信州大学教育学部言語教育講座

Japanese University Students' Choice of the Order of Family and Given Names In Self-Introductions in English

SAKAI Hideki: Language Education, Faculty of Education, Shinshu University

This survey investigated (a) the order in which Japanese university students say their names to foreign people in English and (b) the reasons why they choose such orders of family and given names. A questionnaire was administered to 65 1st-year Japanese university students. First, 35.4% of the participants wrote their names in Japanese order (i.e., family name + given name), whereas 61.5% used the reverse order. Second, 30 of the participants (46.1%) changed the order of their names according to where the interlocutor was from. Of the 30, 21 participants chose the reverse order for an American and a Hungarian and the Japanese order for a Chinese. Third, the most frequent place where the participants had learned the reverse order of names was elementary schools (41.5%). Lastly, most participants answered that they preferred either order (47.7%). The results are discussed in terms of intercultural understanding and English education.

【キーワード】 異文化理解 姓名の言い方 自己紹介場面 ローマ字表記

1. ローマ字による日本人名の表記方法

本研究では、英語学習者はどのようにローマ字で日本人名を表記するのか、また、どのような理由によって姓名の順番を選択するのかについて実態を明らかにすることを目的とする。Sakai Hideki というような日本式の順番(本来型¹⁾)か Hideki Sakai というような「名+姓」という姓名の言い方(逆転型)かという問題について、森住(1997)は「一見些細なことのように見えるが、母語や外国語などことばをどうとらえるか、ことばが人間と社会とどのように関係しているかという言語観の核に到達する問題でもある」(p. 39)と指摘している。森住は本来型の順番を主張し、その論拠として、名前は個人や民族のアイデンティティーにかかわっていること、異質な存在と共存していくことという異文化間理解の根底にかかわること、他の東アジア諸国における表記法との整合性などを挙げている。

日本において逆転型の表記は初めから用いられていたわけではなかった。須田(1988)によれば、日本人による姓名のローマ字表記は少なくとも1600年まで遡れるとしている

(p. 78). この 1600 年の表記は本来型であった。1860 年までは、例外は見られるものの、日本人の氏名は本来型で表記されていたが、『脱亜入欧』の流れの中で、日本人が自分の名を欧米流に表記する事例が発生したのである」と述べ、1865 年以降、逆転型の表記が発生したと指摘している(須田, 1988, p. 84)。また、森住(1997)によれば、外交文書等に見られる署名では、幕末から明治時代にかけて本来型で書かれていた。これが、1880 年代までには本来型と逆転型が混合で用いられるようになり、1880 年代の後半から専ら使用されるのは逆転型となる。森住は、福沢諭吉の脱亜論や 1883 (明治 16) 年の鹿鳴館の開館に触れ、「英語式を採用し始めたのは、この頃から日本は列強と交流を始め、彼らに追いつくためにその仲間入りをしたいと願うようになったからであろう」(p. 41) と述べている。いわゆる欧米化と呼応する現象であると指摘している。

近年では、本来型の表記を推奨する動きが主流である。姓名の表記について、2000 (平成 12) 年 12 月に提出された第 22 期国語審議会の答申「国際社会に対応する日本語の在り方」は次のように提案している。

・・・国語審議会としては、人類の持つ言語や文化の多様性を人類全体が意識し、生かしていくべきであるという立場から、そのような際に、一定の書式に従って書かれる名簿や書類などは別として、一般的には各々の人名固有の形式が生きる形で紹介・記述されることが望ましいと考える。したがって、日本人の姓名については、ローマ字表記においても「姓一名」の順(例えば Yamada Haruo)とすることが望ましい。なお、従来の慣習に基づく誤解を防ぐために、姓をすべて大文字とする(YAMADA Haruo)、姓と名の間にコンマを打つ(Yamada, Haruo)などの方法で、「姓一名」の構造を示すことも考えられよう。今後、官公庁や報道機関等において、日本人の姓名をローマ字で表記する場合、並びに学校教育における英語等の指導においても、以上の趣旨が生かされることを希望する。

この動きを受けて、2002 (平成 14) 年度版よりすべての中学の検定教科書において日本人の登場人物の姓名の言い方は本来型となっている。²

2. 先行研究

本節では、ローマ字による姓名の表記方法に関する調査を概観する。最初の調査は、1995 (平成 7) 年 4 月に 16 歳以上の 2,212 名に対して実施された文化庁文化庁国語課の「国語に関する世論調査」である。「外国で使うためにローマ字書きの名刺を作る場合、姓と名のどちらを先に書くべきだと思うか」という質問に対して、本来型が 24.6% であり、逆転型が 62.3% であった。2 つ目の調査は研究社出版(1996)によるものである。356 人の英語教育関係者の名刺の姓名の表記を調べたところ、本来型が 7.6% であり、逆転型が 92.4% であった。3 番目の調査は、中学 3 年生 61 名を対象に質問紙票調査を行った酒井(2000)で

ある。中学生は逆転型を採用している *New Horizon* (東京書籍) を教科書として使用していた。ローマ字で名前を書くように指示したところ、本来型が 39.4%、逆転型が 59.0%であった。これらの調査結果より、どの調査対象者においても本来型よりも逆転型の割合が多かったが、英語学習の初期には本来型で姓名を書く学習者が比較的多いのに対して、英語教育関係者になると逆転型の回答がますます多くなることが示される。

さらに、酒井 (2000) は、アメリカ出身の人に対する自己紹介の場面と、中国出身の人に対する自己紹介の場면을提示し、どのように名前を言うか、また、その理由は何かを質問した。その結果、アメリカ出身の人に対しては、本来型が 11.5%、逆転型が 86.9%であったのに対して、中国出身の人に対しては、本来型が 41.0%、逆転型が 54.1%であった。相手に関わらず、一貫して本来型を用いた人数は 7名 (12.1%) であり、逆転型を用いた人数は 33名 (56.9%) であった。一方、相手に応じて、順番を変えた人数は 18名 (31.0%) であった。これらの結果から、中学生の中には相手のことを考慮して姓名の順番を変えている者がいることが示された。姓名の順番の選択理由の分析からも、場面や相手の習慣を考慮して名前の順番を選択していることが指示された。また、名+姓という逆転型の言い方は英語の言い方であり通じやすいという認識や、外国ではみんな逆転型の姓名の言い方をするという誤解が学校教育によって形成されていることも指摘された。逆転型を教わった場所として、最も多かった回答は、学校 (44名, 80.0%) であった。また、本来型と逆転型のどちらを好むかを聞いたところ、54.1% の中学生がどちらでもよいと答え、18.0% が本来型、27.9% が逆転型と回答した。

3. 研究課題

本研究では、英語による自己紹介場面において、(a) 日本人英語学習者はどのような姓名の順番を選択するのか、また、(b) その理由は何なのか、を主な研究課題とした。

4. 方法

4.1 手順及び参加者

2007年4月に実施された「新入生ゼミナール」の筆者が担当する授業において、質問紙票を受講生に配布した。受講生には、質問紙票の内容は講義の中で扱うことを伝え、出席確認のため全員必ず記入するように求めた。その上で、質問紙票の結果を研究としてまとめたい意向を伝え、研究目的で回答を使用してもよい場合には、回答の使用許可として「よい」に○をするように依頼した。研究としてまとめる際には、個人が特定されないようにすることを伝えた。回答時間は約10分であった。質問紙票への回答が終わったあと、英語科教育において姓名の言い方がどのように扱われているかという講義を行った。

受講生は大学1年生であった。すなわち、2002(平成14)年には、中学2年生か3年生であった。受講生66名のうち、質問紙票への回答を研究目的で使用することを許可しなかった学生1名を除き、65名の回答を分析対象とした。表1は、参加者の情報を示してい

る。学部別でみると、教育学部が大半を占め (69.2%), 続いて人文学部が多かった (23.1%)。なお、教育学部生の所属講座の点からは、45 人中 32 人 (71.1%) が言語教育講座であった。海外経験者は、19 名 (29.2%) であった。中学校のときに使用していた教科書の種類は、*New Horizon* (東京書籍) が最も多く 30 人 (46.2%) であった。*New Crown* (三省堂) は 11 人 (16.9%) で、*Sunshine* (開隆堂) は 5 人 (7.7%) であった。また、2 種類の教科書名を挙げた者が 19 人 (29.2%) いた。

表 1. 参加者の情報 (所属学部, 海外経験, 中学使用教科書) ($N = 65$)

情報	カテゴリー	人数	割合	情報	カテゴリー	人数	割合
学部	教育学部	45	69.2%	海外	経験あり	19	29.2%
	言語教育	(32)			経験なし	46	70.8%
	教育実践	(7)		教科書	<i>NH</i>	30	46.2%
	芸術教育	(2)			<i>NC</i>	11	16.9%
	野外教育	(2)			<i>SS</i>	5	7.7%
	障害児教育	(1)			<i>NC & NH</i>	15	23.1%
	生活科学	(1)			<i>NH & SS</i>	3	4.6%
	人文学部	15	23.1%		<i>SS & CO</i>	1	1.5%
	経済学部	2	3.1%				
	工学部	1	1.5%				
農学部	2	3.1%					

注. *NC* = *New Crown*, *NH* = *New Horizon*, *SS* = *Sunshine*, *CO* = *Columbus*.

4.2 質問紙票

酒井 (2000) の質問紙票を改良したものを使用した。まず、参加者の背景情報に関して、海外経験と中学で使用した検定教科書に関する質問が与えられた。次に、参加者はローマ字で名前を書くように求められた。3 番目に、「アメリカ出身の人が、あなたの教室にやってきました。日本語がわかりません。その方があなたの名前を知りたいそうです。どのようにいいますか。」という質問が与えられ、「My name is」のあとに続けて名前を記入するように求められた。同じ質問が、「中国出身の人」と「ハンガリー出身の人」に関するものも与えられた。そのあとで、理由を自由記述するように求められた。酒井 (2000) の質問紙票では、2 つの地域 (アメリカ, 中国) を扱ったが、本研究ではハンガリーを加えた。これは、ハンガリーが姓+名という順番で姓名を言う地域だからである。酒井 (2000) は、外国の人の姓名の言い方はみな逆転型であると誤解することの危険性を指摘した (p. 21)。ハンガリーという地域を含めることで、この誤解の有無が明らかになると考えた。4 番目に、逆転型の言い方を習った場所に関する質問が与えられた。酒井 (2000) の質問紙票では、選択肢は「学校、英語教室、テレビや新聞、その他」であったが、本研究では、大学生に

調査を実施することと、小学校から英語を習っている可能性があることから、選択肢を増やし、「小学校、中学校、高等学校、英語教室（小学校時）、英語教室（中学校時）、テレビや新聞、その他」という選択肢を挙げた。最後に、本来型と逆転型、どちらを好むか、またその理由は何かという質問が与えられた。

5. 結果

5.1 ローマ字による姓名の順番

「あなたの名前をローマ字で書いてください」という項目に対する回答の結果は、本来型が 23 名 (35.4%)、逆転型が 40 名 (61.5%)、名のみを書いた「その他」が 2 名 (3.1%) であった。文化庁文化語課 (1995) 及び研究社出版 (1996) の調査と比べると、本研究の参加者である日本人大学生は本来型で姓名を書いた割合は大きかったが、酒井 (2000) の中学生と比べると小さかった。

5.2 自己紹介場面ごとの姓名の順番

表 2 は、3 つの地域（アメリカ、中国、ハンガリー）の出身者に対する自己紹介場面ごどのような姓名の順番を選択するかを示している。地域によらず、一貫して本来型で姓名を言う回答者は 4 名 (6.2%)、逆転型で姓名を言う回答者は 29 名 (44.6%) であった。一方、相手の出身地域によって、姓名の順番を変えた回答者は 30 名 (46.1%) であった。30 名中、アメリカ出身の人に対してのみ逆転型を選択した回答者は 9 名 (13.8%) であった。また、アメリカ出身の人とハンガリー出身の人に対して逆転型を選択した回答者は 21 名 (32.3%) であった。このことは、ハンガリーではアメリカと同様に逆転型の姓名の言い方をするという誤解の存在を示唆している。

表 2. 自己紹介場面ごとの姓名の順番と、ローマ字表記の順番選択ごとの内訳

アメリカ・中国・ハンガリー	人数 (割合)	内訳		
		本来型	逆転型	その他
日本式・日本式・日本式	4 (6.2%)	3	1	0
逆転式・逆転式・逆転式	29 (44.6%)	10	18	1
逆転式・日本式・日本式	9 (13.8%)	5	4	0
逆転式・日本式・逆転式	21 (32.3%)	4	17	0
下の名前のみ	2 (3.1%)	1	0	1

注. 論文では「本来型」・「逆転型」という用語を用いているが、質問紙票の中ではわかりやすさの点から「日本式」・「逆転式」という用語を用いた。

本来型で統一している回答者の場合、自己紹介場面ごとの姓名の順番の選択理由として、「日本では名字から言うので、日本式の言い方をして日本文化のまま伝えたいと思ったか

ら」、「日本人だから日本人らしく日本式で」、「日本式がよいと英語の授業のときに言われたから」、「中学校の頃からずっと日本式を使っていたから」が挙げられた。つまり、自文化を尊重するという理由と、教育の影響が見られる理由があった。

表3は、逆転型で統一している回答者の選択理由をまとめたものである。「英語を使うときは逆転型である」(理由1)、「英語圏・欧米は逆転型である」(理由3)という認識が見られる。また、相手が外国の人だから逆転型を用いるという回答(理由4)も見られた。

表3. 逆転型で統一している回答者の選択理由 (n = 29)

理由	人数	例
1. 英語の言い方だから	15 (51.7%)	・英語でいうなら英語にならった言い方のほうがいいと思うから。・英語で紹介しているので、ファーストネームを先に言うほうがいいと思ったから。
2. 授業で逆転式だったから	4 (13.8%)	・今までの英語の授業で逆転式でやってきたから。・学校では、逆転式の方をおそわったので。・中学校の時に、英語の時には逆転式で書くように言われたから。
3. 英語圏・欧米では逆転型だから	4 (13.8%)	・外国(英語圏)では氏名を言う時に名前→苗字の順で言うということを習ったので、英語で自己紹介する際にはその順にした方がよいのではないかと思ったから。・欧米では先に名前をいうため。
4. 外国の人だから	3 (10.3%)	・外国の人に対してはそちらの方が適切であるからと思ったから。・外国はたいてい名前から言うイメージがあるから。
5. その他	3 (10.3%)	・My name isと言われると自然に逆転と思うくせがなぜかついているから。英語は国際語だと思っているから。・逆転させなくても良いと聞いたことはあるけれど、小学校の頃から逆転で言っていたので日本式で言うのは少し不安だから。

注. 割合は小数点以下第二位を四捨五入しているため、合計が 100.0% になっていない。

アメリカ出身の人に対してのみ逆転型を選択した回答者9名は全員相手の習慣に合わせるためという理由を述べた。しかし、持っている知識は異なっている。まず、「相手の国にあわせようと思ったから」や「地域の言い方を考えたから」というような漠然とした理由を述べた者が2名(22.2%)いた。次に、「アメリカでは逆転式で名前を言うこと、中国では苗字を先に言うことを知っているため、誤解が起きないようにするため。ハンガリーは日本式と聞いたことがあり、まず日本式で言う」や「アメリカでは名前が名→姓であらわされるので、どちらが姓でどちらが名か理解しやすいと思うから。中国・ハンガリーでは姓→名であらわされるので、どちらが姓でどちらが名か理解しやすいと思うから」というように、中国とハンガリーでは姓+名の順番であることを知った上で、姓名の順番を選択していた者が3名(33.3%)いた。残りの4名(44.4%)は、「アメリカは英語圏であるので、英語の方式に従い逆転式にしたが、その他の国はどちらを先にしたらいいかわからないの

で、日本のしきたりに従って名字、名前の順にした」というように、相手に合わせようとしているが、相手の言い方がわからないため本来型を選択したという回答をした。

表4は、中国出身の人に対してのみ本来型を選択し、アメリカ出身の人とハンガリー出身の人に対して逆転型を選択した回答者の選択理由をまとめたものである。相手に合わせるためという理由（理由3）が見られるが、直接記述されていなくても、ほとんどの理由が相手に合わせるということを基本にしていると考えられる。ハンガリーは逆転型を用いるという誤解（理由1や理由4）が見られる。また、相手の地域では姓名の言い方をどのようにするかかわからないので逆転型を使うという理由もあった（理由2）。

表4. 中国出身の人に対してのみ本来型を選択した回答者の選択理由 (n = 21)

理由	人数	例
1. ハンガリーに関して誤解している理由	7 (33.3%)	・アメリカでは名前が先で姓が後なので逆転式にした。中国は日本式でハンガリーでは逆転式が通用していると思ったから。・英語圏のアメリカ・ハンガリーは名前重視、中国は家族を大事にすると思ったから。・中国はアジアだから日本式で、他は欧米なのでそっち式にしました。
2. ハンガリーはわからないので	4 (19.0%)	・アメリカでは、英語式に合わせて名前を先に、中国は、中国語式に合わせて名前を先に、ハンガリー語は、分からないけれど、親しみを込めて名前で呼んでほしいので、名前を先に。・アメリカはファミリーネームが後で教わったから。中国は何か名字が先だった気がするから。ハンガリーはよく分かりませんでした。
3. 相手に合わせるため	4 (19.0%)	・その国の人の名前がその形式だから。・相手の国の名前の順番に合わせてようと思っただから。
4. 中国は本来型だから	3 (14.3%)	・中国の人には逆にする必要がないから。中国は名字・名前の順なので日本式で通じると思う。
5. その他	3 (14.3%)	・相手に分かり易いように。・今は名字一名前でもいいらしいので、日本式を混ぜた。むしろ下の名前しか言わない気もしますが…。・なんとなく。

注. 割合は小数点以下第二位を四捨五入しているため、合計が 100.0% になっていない。

5.3 逆転型を教わった場所

表5は、逆転型の姓名の言い方を教わった場所についてまとめたものである。「逆転型の言い方をどこで習いましたか」という質問であった。最も多かったのは、「小学校」で27名(41.5%)であり、2番目は「中学校」で20名(30.8%)であった。小学校と中学校をあわせると、逆転型を教わった場所の72.3%を占める。さらに、「小学校時の英語教室」という回答者も11名(16.9%)おり、少なくなかった。「小学校」と「小学校時の英語教室」を合わせると58.4%になり、半数以上の回答者が小学校時に逆転型を教わったことになる。

表 5. 逆転型を教わった場所

場所	人数	割合
小学校	27	41.5%
英語教室(小学校時)	11	16.9%
中学校	20	30.8%
中学校・英語教室(小学校時)	2	3.1%
高等学校	1	1.5%
テレビや新聞	1	1.5%
その他 ¹	2	3.1%
無回答	1	1.5%
合計	65	99.9% ²

注 1. 「その他」の回答は、「小学生のとき 自主学习」(1名)と「家」(1名)であった。

注 2. 割合は小数点以下第二位を四捨五入しているため、合計が 100.0% になっていない。

5.4 姓名の言い方の好みとその理由

姓名の言い方に関する結果は、「どちらでもよい」という回答が最も多く (31名, 47.7%), 本来型 (15名, 23.1%) と逆転型 (16名, 24.6%) はほぼ同じ人数であった。

姓名の言い方の好みの理由について、本来型を選択した回答者は、「日本式のほうが慣れているから」、「日本人だから」、「本来の呼び方だから」、「わざわざ、そこまで英語に合わせなくてもよいと思うから」など、個人や民族のアイデンティティーにかかわる記述がほとんどであった。

逆転型を選択した場合の理由としては、「英語での自己紹介だったら英語圏の人たちに合わせたほうがよいと思った」というように、英語の順番だからという認識や、相手に合わせようという姿勢によるものと、「英語で自己紹介するなら逆転式がいいと思う。伝わりやすいのかなと思うから」という伝わりやすさに関する理由が挙げられた。また、「逆転型の言い方に慣れたから」という受動的な理由を挙げた者が 16名中 4名 (25.0%) いた。

本来型と逆転型のどちらでもよいという回答を選択した場合の理由は、大きく 3つに分けることができる。第一に、「相手に合わせて使い分ければ良いと思うから」という理由であり、酒井 (2000) で指摘したように相手や場面に応じて対応するという相対的な理由である。第二に、「自分の名前が相手に伝わればどちらでもよい」や「自己紹介して、名前で呼ばれても名字で呼ばれても自分の名前であることに変わりはないから」というように姓名の順番にこだわらないという理由であり、曖昧性を受容する理由である。第三に、「どちらが名字でどちらが名前かをはっきりと説明すればどちらでも良いと思う」や「言葉の違いは文化の違いから表れる学説だろうから、お互いの文化を尊重すべきだから」というように、文化の違いを認識した上で、どちらでもよいとする理由である。

6. 考察

本調査の結果より、本来型 (35.4%) よりも逆転型 (61.5%) で姓名を書くことが多いことがわかった。本来型を選択した回答者の割合は、中学生を対象にした酒井 (2000) の 39.4% より小さかったが、一般の人を対象にした文化庁 (1995) の 24.6% や英語教育関係者を対象にした 7.6% よりも大きかった。相手の出身地域によらず、一貫して本来型で姓名を書いた回答者の理由を見てみると、「自文化を尊重する」という理由と「授業のときに言われたから」というような教育の影響が見られる理由があった。このことから、2002 (平成 14) 年度版のすべての英語教科書で本来型が採用されたことによって、本来型の表記を目にすることが多くなり、さらに姓名の言い方と個人や民族のアイデンティティーとの関係を考える機会が増えたことが示唆される。

一方で、相手に合わせて姓名の言い方を選択する回答者も多くみられた。この問題点として、相手に合わせるためには、相手の習慣に対する知識が必要なことが挙げられよう。ハンガリーが本来型の姓名の順番を用いるという知識のある回答者は相手に正しく合わせることができるが、「ハンガリーは逆転型を用いる」という誤解を持っている場合や、相手の習慣がわからない場合には、相手に合わせることができない。さらに、知識がない場合には、「外国なので」「英語圏なので」「欧米なので」逆転型を選択するというような固定観念に基づく判断が見られるようになる。

相手の出身地域によらず、一貫して逆転型を選択した回答者の場合、29 名中 15 名 (51.7%) が「英語の言い方だから」と理由を述べた。この考え方には、「英語 = 逆転型」という誤解が見られる。姓+名という順番である東アジア諸国の多くは、英語表記をする際にも、本来型を採用している (森住, 1997, p. 52)。このような事実を知る必要がある。

逆転型を教わった場所として、「小学校」が最も多い回答だったことはとても興味深い。「英語教室 (小学校時)」とあわせると半数以上の回答者が小学校時に逆転型を教わったことになる。中学校の検定教科書で本来型の順番に触れたとしても、それ以前より逆転型に慣れてしまっている可能性がある。この意味でも、今後、小学校の英語活動にて、姓名の言い方をどのように扱っていくかはとても重要になってくると思われる。

姓名の言い方の好みに関する結果は、約半数がどちらでもよいと回答した。その理由として、相手に合わせて使い分ければよいという理由と、姓でも名でも自分の名前であることには変わりはないのだからどちらでもよいという理由があった。前者の理由の問題点は、既に述べたとおり、相手の文化や習慣について正しい理解をしていることが必要になることである。後者の理由の問題点は、名前が個のアイデンティティーの中核を成すことを軽視していることであり、自分の名前を大切にしないことが他人の名前を大切にしないことにつながってしまう可能性があることである。

7. 終わりに

姓名の言い方は一見些細なことかもしれない。しかし、森住 (1997) が指摘するように「言語観の核に到達する問題」(p. 39) でもある。むしろ姓名の言い方を切り口にして、文化の題材を取り上げるとよいと思われる。世界には名前の言い方がさまざま存在していること、日本は「姓+名」という言い方をすること、「姓」と「名」の言い方をしない地域もあること、ミドル・ネームを用いる地域があること、「名+姓」という言い方をする地域があること、などを扱って、児童や生徒に自分の文化や他の文化について考えさせることもできる。さらに、My name is Sakai Hideki. Sakai is my family name. Hideki is my given name. Is Sakai your family name? という英語表現を練習させながら、自分の文化を説明する方法や相手の文化についてたずねる方法を教えてもよい。教師自身が、「英語では、名前をひっくりかえすんだぜえ。ジョーシキじゃん」(研究社出版, 1996, p. 34) という「常識」によって、無自覚的に逆転型を教えることだけは避けるべきであろう。

注

1. 本稿では、日本文化の視点から「本来型」「逆転型」と表記している。この用語は、理解のしやすさの点を考慮して採用されている。したがって、どちらか一方の優劣を示すものではない。
2. 2002 (平成 14) 年度版以前は、中学の検定教科書 7 種類のうち、*New Crown* (三省堂) だけが本来型の姓名の言い方を 1987 (昭和 62) 年度版より採用している (森住, 1997)。

文献

文化庁文化部国語課, 1995, 「国語に関する世論調査」, http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/yoronchousa/h07/kekka.html

第 22 期国語審議会, 2000, 「国際社会に対応する日本語の在り方」, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/kokugo/toushin/001217.htm

研究社出版, 1996, 7 月, 『現代英語教育』, 研究社出版, 東京。

森住衛, 1997, 英語に表われる日本人名の表記法, 渡邊時夫教授還暦記念論文集刊行・編集委員会編, 『英語科教育における創造性』, 三省堂, 東京, pp. 39-54.

酒井英樹, 2000, 名字と名前の順番に対する中学生の意識調査, コミュニケーションと言語教育, 2, pp. 18-26.

須田稔, 1988, 「国際化」と日本人氏名のローマ字表記—その現状・歴史・課題—, 立命館産業社会論集, 24(1), pp. 65-102.

(2008 年 5 月 8 日 受付)

(2008 年 10 月 2 日 受理)